



時計台の鐘

第 72 号

特定非営利活動法人

さっぽろ時計台の会

会長 木原直彦

札幌市中央区北1条西2丁目

重要文化財・時計台内

TEL 011-251-5944



先達に導かれて

副会長 坂本千代美

遡る事三十二年程前、田上義也理事長のお薦めで時計台をまもる市民の会（現さっぽろ時計台の会）に入会。当時女性会員は希少で錚々たる年長の男性が主でした。私如き世代の女性は場違いではと戸惑い、後悔が先に立つが、日を重なる度に各々が立場、肩書きを超越し、市民として時計台愛護の信念一筋の姿勢に胸を打たれたのが今も残る。

一昨年、当会創立三十周年を迎え改めて歴史を回想。発足時の方々も年々変わり、新しい方々も増え、唯一創立に関わられた佐々木名誉会長も病床に臥し、祝賀会にもお姿はなく、各位が心寂しく病氣平癒を念じたものの昨年永遠の旅に。時計台創建百三十年を待たずに、無念でならない。

一口に三十年というが長い年月には幾度かの曲折が。時には会の存続すらも危つい時も、何とか回避。現在にあるのは佐々木さんのお陰といっても過言ではない。特筆すると、折しもの経済不況の煽りか急速な会員減、減収の悪状況の中、時計台改修工事と重なり売店も休業やむなく、八方塞がりの罟。方策をと理事会で協議。先ずは会員増強に取り組むが実績は遅々として進まず、新会員は佐々木さんの知人・友人が大多数でした。又、会務も財政逼迫の厳しい中で、従来の運営・行事も滞りなく実施。表面的には極めて平常に映ったようだが、その裏で佐々木さん個人の多大な篤志があったとは知らされていない。また、二〇〇〇年の黎明を祝って時計台の会に元気をと、佐々木さんを中心に若手の小西さん松村さん他会員総動員。オリジナルの時計台ラベルを付け限定販売用のワイン、日本酒の許可取り付けに奔走。十二月三十一日の出店には佐々木家総出の協力（協力は貴重な思い出）。

また、ITを駆使し、児童絵画展作品をシールに作成・販売し、売店収益に貢献。等々枚挙にいとまはない。あの頃、厳しい状況下での理事会で、甲論乙駁の険しい空気の中、日頃和やかに寡黙な佐々木理事長（当時）は、「奉仕協力とは物・金だけに非ず、時・知恵・人脈・物、各自が可能な方法が望ましくそれが相互力です」と説得された。私はそのお考えに改めて感銘。これまでの支障なき運営は佐々木さんの密やかな支援と知っておりました。

その後売店再開。しかし二年余りに亘る休業の歪みなのか伸び悩んだ時もあったが、近年、販売品・陳列等に現場スタッフの工夫が功を奏し売上げも伸び、かつての苦境からも脱却。さぞ佐々木さんも安堵されておられよう。

自慢も、誇張も、強要もなく、ひたすら陰で無償の行為に徹してこられたのは、時計台愛護、創始者の使命感は申すまでもなく、それ以前に佐々木惣二郎氏の仁徳に他ならず、崇敬の念を禁じえない。

どうぞ安らかなお休みをお祈りいたします。



カット絵は、関堂圭子さんの四季の時計台絵ハガキから

哀惜！会の大きな柱を失う。

会草創期からの会員として、更には昭和58年度からは常任理事、平成5年度からは副会長として、本会活動の実質的な牽引車として会をしっかりとリードしてきていただいた佐々木惣二郎さんが昨年6月2日にご逝去なされました。最近是好調な売店事業に支えられ安心できる会運営がなされているとはいえ、一時は会の存続が危ぶまれる苦しい時代もありましたが、そんな時も力強く会を支えていただいた氏の姿がありました。会の柱を失った痛手のあまりの大きさに言葉もありません。ここより、佐々木惣二郎さんのご冥福をお祈りいたします。



弔辞

謹んでさっぽろ時計台の会を代表し、当会名誉会長・佐々木惣二郎さんのご霊前にお別れの言葉を申し述べます。札幌時計台とその真向いにあった老舗の丸惣旅館は切っても切れない深い縁で結ばれていました。札幌を訪れた多くの知名人は丸惣旅館で聴いた時計台の鐘の音はとも印象的だったと回想しておられます。佐々木さんはその生涯、時計台と共に歩まれたのですから、どんなに親しみを持っておられたか計り知れません。

申すまでもなく、時計台は札幌の掛替えない財産です。その時計台の存在が危機に落ち、たことがありました。あの高度成長時代、札幌の街が驚異的な発展を遂げたときです。そうした折りの昭和五十年、今から三十二年前にさっぽろ時計台の会の前身である時計台をまもる市民の会が誕生しました。その時から現在に至るまで一貫して時計台を守り育てることに愛情をそそいで来られたのが、ほかならぬ佐々木さんでした。その長い歩みのなかで、佐々木さんはまさに一本の太い芯のごとくぼくらの運動を支えて下さいました。佐々木さんが芯になってくださったことで、今のぼくらの会があるのです。その献身的なご恩をぼくらは忘れることはないでしょう。

佐々木さんは、穏やかで誠実なお人柄でした。ぼくなどは、もともと良質な人がおられる、と思ったものでした。札幌の街の発展は目覚ましいものがあり、街を歩いていても、かつて此処に何々があった、としか言いようがありません。そうしたなかで、時計台は昔の姿を今にとどめ、あの澄んだ鐘の音が市民や観光客の耳に、そして心に届きつづけています。都心部の中で時計台が、古風で、しかもみやびな形ちで建っているのは奇跡としか言いようがありません。

佐々木さんが、札幌の歴史と文化が染み透った時計台をどれほど大切に、愛情をそそいでおられたか痛いほどわかります。よく私たちは佐々木さんのご功績に感謝の念を捧げつつ、時計台をより価値ある存在にすることでおむくい致したいと思っております。

佐々木さんは今、長いご闘病を経て尊い人生を終えられました。かえすがえすも残念でなりません。どうか、時計台の古雅な姿をおもいうかべ、あの鐘の音に癒されて永遠の眠りにつかれてください。

平成十九年六月四日

NPO法人さっぽろ時計台の会 会長 木原 直彦

佐々木惣二郎名誉会長を偲ぶ

顧問 吉田 安

「時計台をまもる市民の会」が発足した昭和五十年（一九七五年）以来、初代の高倉新一郎氏を始め四代目現職の木原直彦氏に至るまで歴代会長を補佐して、実質的に会の運営に奔走されてきた故・佐々木惣二郎さんのご遺徳を忘れるわけにはいきません。

佐々木さんは、明治十八年創業という札幌では老舗中の老舗、丸惣旅館を営む徳三郎、ミヨさんの次男として昭和三年に出生。生家の斜向かいにあった中央創成小、次いで札幌一中（現・南高）から北大農学部農業経済学科に進み、卒業後は恩師でもあった高倉新一郎教授のもとで助手として学内に残り、農業経済の研究に没頭されていきました。

しかし、長兄の惣太郎さんが若くして病死、父の他界もあって程なく象牙の塔を去り、家業の旅館業を継がれました。生来、学究肌の佐々木さんにとって、終生の志でもあったライフワークの学問への道を絶たれた無念の思いがあったに違いありません。

そんな思いの捌け口にもなったのでしょうか。出始めた時計台の移転論に危機感を抱く周辺市民の先頭に立って、文化人や教育界の有志とともに「時計台をまもる市民の会」の立ち上げにかかわり、初代会長に大学時代の恩師、高倉新一郎教授を招聘する役割を果たしています。

ご母堂のミヨさんとともに発起人会にも参画し、時計台にもっとも近い隣家という地縁から丸惣旅館経営のかたわら当会の庶務雑務を始めイベント企画や財務の仕事まで引き受けました。

長年、理事長や副会長としても会運営の先頭に立っていましたが、数年前から腎臓の病いで市立札幌病院で週三回にも及ぶ人工透析を受けられ、三年前の会創設三十周年を祝う「記念祝賀会」にも出席できず、昨年六月二日、逝去されました。

茲に、時計台を守った同志であり、名誉会長の死を悼み、ご冥福を祈ります。

合掌

❄️❄️❄️ 盛会・盛大に時計台まつり記念行事終了 ❄️❄️❄️

平成19年度 会の主な活動

- 5月7日 時計台まつり実行委員の委嘱依頼
- 19日 会計監査
- 22日 時計台まつり実行委員会
- 25日 札幌市へ記念行事負担金交付申請
梅津奨学院、道新、北電へ、その後順次申請
- 6月1日 札幌市、NHK等へ名義後援、協賛、特別賞出賞の依頼 小学校長等関係各所へ後援申請
- 6日 第1回理事会 総会議案審議
- 13日 第1回時計台まつり記念 講演
「日中文化交流の源流慈覚大師円仁唐の旅」
- 23日 定期総会
- 26日 児童絵画展、文芸作品コンクールの審査委員委嘱依頼
- 7月5日 児童絵画作品募集依頼
- 6日 区役所、区民センター他へ作品募集のチラシ配布
- 14日 第2回時計台まつり記念 管楽アンサンブルの夕べ 札幌市民バンド連絡協議会加盟吹奏楽団
- 15日 道新社告 児童絵画、文芸作品募集記事掲載
- 8月1日 市民文芸作品コンクール作品受付開始
- 19日 第3回時計台まつり記念 器楽演奏と札幌の歌 北海道国際音楽交流協会
- 22日 文芸作品審査依頼
- 9月1日 児童絵画展作品受付開始
- 14日 道新に市民文芸作品コンクール入賞者発表
- 16日 児童絵画作品審査会
- 26日 道新に児童絵画展入賞者発表
- 28日 第4回時計台まつり記念マンドリン五重奏 札幌プレクトラム・アンサンブル
- 10月10～
- 16日 児童絵画・市民文芸優秀作品展示
- 16日 周年記念式典・優秀者表彰式
周年記念音楽コンサート サクソフォンアンサンブルグループ
記念切手販売開始(80円切手シート3種)
- 19日 後援・協賛事業終了報告とお礼
- 26日 時計台まつり記念行事会計監査
- 11月14日 第2回時計台まつり実行委員会
- 12月15日 第2回理事会 時計台創建130周年への対応策検討
- 1月4日 時計台まつり記念行事出演者の公募「広報さっぽろ」 16日「道新」
- 18日 第2回理事会 時計台創建130周年への対応策検討
- 2月1日 会報72号発行予定

◆創建記念式典・表彰式・呈茶サービス

今年度も市長、教育長のご参列をいただき盛大に開催することができた。また、今年度の創建記念演奏会は表彰式関係者のほかに一般の聴衆者の参加を当日入場整理券を発行する方式で行ったが、特に混乱する事なく実施できたので、次年度も踏襲したい。

また、裏千家淡交会青年部のご協力で例年行われている呈茶サービスは、時計台のご好意で始めてステージを使ったお点前も披露され観光客に大好評を得た。



市長挨拶



呈茶サービス

◆講演会・演奏会

講演会及び各種ジャンルの音楽コンサートを年5回企画した。「広報さっぽろ」、北海道新聞社社告、各区民センター等公共施設へのチラシ配布を通して市民への広報に努めた。結果、各回とも昨年度を大幅に上回る参加があり盛会であった。札幌市時計台をより市民に親しんでもらい、更には行事を通して札幌市への郷土愛、市民意識の向上を図るとする本行事の目的を充分に果たすことが出来たものと考えている。



演奏会風景

◆児童絵画展

各小学校、絵画教室等の協力により昨年度を上回る応募があった。また今年度も学級単位での応募もみられたが、自分たちの郷土、自分たちの住む街への関心を高める意味でも評価すべき取組みと考える。【自分の思いを素直にのびのびと表した作品が多く見られた。高学年になるにつれ、確かな表現技法を身につけ、建物を含んだ風景全体をより立体的・写実的に表そうと、時間をかけた力作がそろっていました。どの作品からも、札幌の歴史的建造物や地域にある身近な建物に愛着を感じ、一生懸命描こうとするまっすぐな思いが伝わってきました】という審査委員の講評もあり、大きな成果が得られた。

◆市民文芸作品コンクール

今年度も審査委員の先生方にご協力をいただき市内の各句会等に作品募集のチラシを配布。また、各区役所、区民センター、他公共施設にもチラシを配布し、PRに努めた。結果、200点近くの作品の応募があったが昨年を上回ることではできなかった。

新しく六名の役員の方々が昨年六月六日の平成十九年度第一回理事会で選任され、六月二十三日の定期総会で報告がなされました。新任の役員は以下の通りです。

- ◆副会長 斎藤大雄(前理事) 谷 征輝(前監事)
- ◆理事 佐々木修一(新) 源 鬼彦(新)
- ◆監事 谷口 博(前理事) 前川公美夫(新)

新任の役員を代表して、二人の副会長さんからご挨拶をいただきました。



副会長 斎藤 大雄

時計台の鐘のなかで

この度、NPO法人さっぽろ時計台の会の副会長という大役選ばれ光栄を通り越して、その責任の重さを感じているしだいです。

思えば時計台の会とお付き合いも長く、いま三代の会長に協力していることになりました。すなわち、九島勝太郎、河邨文一郎、そして木原直彦の諸先輩ということになります。その思い出をたどると切りがありませんが、大きな夢の一つだけあります。

それはさっぽろ時計台の会をとおして、時計台の鐘の響くなかで芸術文化の街さっぽろを世界に展開することでありま

守り育ててきた先人の意を大切に



副会長 谷 征輝

現在、私は札幌市民憲章推進会議のお手伝いをさせていただいておりますが、「私たちは時計台の鐘がなる札幌の市民です」と、札幌市民憲章の冒頭に謳われている時計台。このような市民憲章はかなりユニークなものと思われませんが、それだけ時計台が札幌市の観光・文化のシンボルとして永年にわたり市民から愛され、心のよりどころとして親しまれてきた証左に他ならないと思うとともに、本会が三十余年の長きにわたりこの時計台を守り育ててきた意義は大きなものがあると再確認する次第です。

私も二十年以上にわたり会員・監事として本会の活動に微力ながら携わってまいりましたが、この度副会長のご指名を受け、改めてその任の重さに身の引き締まる思いです。もとより浅学・無力な私ではありますが先人の意を大切にしっかりと会の発展に少しでも尽力できればと考えております。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

平成19年度 役員名簿	
顧問	吉田 安
会長	木原 直彦
副会長	坂本千代美
同	斎藤 大雄
同	谷 征輝
専務理事	太田 忠而
事務局長	松村 耕一
理事	小西 克彦
同	小島 博重
同	小島 英子
同	笹川 響
同	島田 無修
同	佐々木 修一
同	池田 健次
同	原 良一
同	川口 剛
同	高山 千鶴
同	源 鬼彦
同	澤小 紀子
同	谷口 博
同	前川 公美夫
監事	
同	
同	

内村鑑三 — 時計台寸描①

木原 直彦

優れたキリスト教思想家の内村鑑三が、国際人として活躍した新渡戸稲造らと札幌農学校の二期生であったことはよく知られている。さきごろ、大正七年(一九一八)の「北海道訪問日記」を興味深く読んだ。農学校の後身である東北帝国大学農科大学が北海道帝国大学となり、札幌市内に電車が走ったほか定山溪鉄道も開通し、開道五十年を祝して道と札幌で記念式典があった年でもある。五十七歳になっていた内村は六月二十八日に札幌駅で多くの旧友たちに迎えられ「其夜旧き演武堂の鐘を聞きながら寝に就いた」。いうまでもなく農学校の演武場だった時計台の鐘のことだが、どこの旅館に泊ったのであろうか。

この年、時計台は札幌区教育会の附属図書館として利用されていたが、北海中学(現北海道)弁論大会、札幌師範学校生徒による桃太郎会のお伽会、開道五十年記念博覧会祝賀弁論大会なども開かれていた。まだ区制時代で人口もわずか九万五千人ていどであったが、札幌が大きく飛躍した年として記憶している。

むかしの時計台の大きな意義として、有名人による講演会など数多くの催しが行われたことがあげられる。内村も大正元年に講演を行っていたが、貴賓館に位置づけられていた大通西一丁目の豊平館以上に大切な催事場だったのである。

編集後記

今号は故佐々木名誉会長の追悼特集とした。私個人としても帳簿・会計のイロハから教えていただいた。事務局としてどうやら独り立ちできたのも氏のお陰。感謝感謝。(太田)